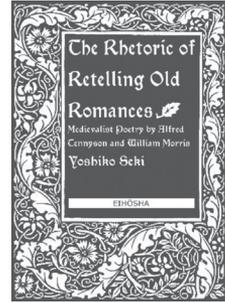


書 評

Yoshiko Seki, *The Rhetoric of Retelling Old Romances: Medievalist Poetry by Alfred Tennyson and William Morris* (Tokyo: Eihōsha, 2015)



川端 康雄

アルフレッド・テニスン(1809-92)とウィリアム・モリス(1834-96)とでは25年の歳の開きがある。モリスの生まれる以前、早くもケンブリッジ大学在学中に第一詩集を刊行し、1850年にワーズワスの後任として桂冠詩人の座に就いたテニスは、モリスがオクスフォード大学に進学した1853年の時点ですでにイギリスの国民詩人となっていた。モリス自身、在学中に詩作を開始するが、小人数の学生サークルのなかで、シェイクスピア作品、またキーツやシェリーらロマン派の詩を好んで読み、同時代の詩人としてはとりわけテニスをよく読んでいたことが確認できる。バーン＝ジョーンズによるモリスの回想のなかには、大学の最初の学期にモリスがテニスンの「シャロット姫」(1832)を「奇妙な、なかば歌うような声で、押韻のところで過度に強勢を置いて朗読する」のを聞いた思い出が印象深く語られている(マッケイルの『モリス伝』より)。これがテニスンを読むモリスの最初期の証言ということになるが、仲間たちが手放しでテニスを称賛していたときに、モリスが一定の留保をつけていたというのも興味深い。もう一人の学友 R. W. ディクソンの回想(おなじくマッケイルの伝記で紹介されている)によれば、モリスは「テニスンの限界」に気づいていて、「テニスンのサー・ガラハッドはかなりおとなしい青年(rather a mild youth)だね」と言った。とはいえ、ディクソンは「テニスン以後はもはやこれ以上の発展はないのではないか、詩ではすべてのことが成し遂げられてしまっている、という気分を私たちはみな持っていた。この思い違いをモリスも[この当時は]共有していた」とも述べている。

19 歳のモリスがこのようにテニスン¹を留保付きながらも深く読み込んでいたという伝記的事実は、その後の詩人としてのモリスの展開を考えるうえで念頭に置くべきことで、私自身はモリス研究の観点からテニスンとモリスの仕事の対応関係について考察する必要があると思っていたところに、本稿で取り上げる関良子氏の英文による研究書が上梓された。

R の頭韻が印象的なタイトルにあるように、本書はテニスンとモリスの中世主義的な物語詩を取り上げ、両者が「^{いにしえ}古」のロマンス^{レトリック}を語り直すにあたっての修辞法をいかに獲得したかを追究し、そうすることでヴィクトリア朝の一大思潮としての中世主義について英文学の分野から新たな知見を加える企図となっている。「古のロマンス」とは、テニスンとモリスが重要なソースとした中世の騎士道物語群、とりわけトマス・マロリーの『アーサー王の死』を意味する。主として扱う詩作品はテニスンについては『国王牧歌』(*Idylls of the King*, 1859-85)、モリスについては第一詩集『グィネヴィアの抗弁とその他の詩』(*The Defence of Guenevere and Other Poems*, 1858)と『地上楽園』(*The Earthly Paradise*, 1868-70)で、3つのパート、併せて8章から構成される。以下、本書のプロットを確認しておく(日本語の書評なので便宜上本書からの引用は和訳する。生硬な拙訳で著者の英語原文の味わいを損なってしまうことになるが、ご寛恕願いたい)。

序論で本書のキーワードである‘Medievalism’と‘Victorianism’という対概念の定義をおこなったうえで、第1部第1章は二人の詩人を検討する予備段階の意味合いで、19世紀半ばに興隆した文芸雑誌の性質とそこで展開された詩論を分析している。この章の冒頭に引用されているマシュー・アーノルドの「この時代と取り巻く環境のすべてがいかに深刻に非詩的(*unpoetical*)であるかを……よく考えてみよ」という言明を手がかりにして、『フレイザーズ・マガジン』や『クォーターリー・レビュー』などの文芸誌において批評家たちがいかに同時代の詩壇について懸念を抱いていたか。これを探ることでテニスンとモリスが詩作をおこなった文化的コンテキストを示している。

第2部(第2～4章)はテニスン論。第2章では1830年代から40年代にかけての初期詩篇のなかで「クラリベル」「イザベル」「マリアーナ」

など、女性を主人公にしたいいわゆる ‘Lady Poems’ と『国王牧歌』の初期形(1859年版)の女性たちの表現を比較し、後者において使用言語がより直裁になり、また女性が公の場でより明確に声を発するようになっていく次第を明らかにしている。この変化はテニスンが1850年に桂冠詩人として「女王の詩人」という役割を担ったことと関連すると著者は分析している。その地位への就任によってテニスはアーサー王の主題について新たな視座を得ることとなり、1859年版の『国王牧歌』の「声を発する女性たち」の強調によって、テニスは「真の意味で女王の詩人になった」

(62)。

女性の声の強調はテニスンの同時代の社会問題への関心を証すものであるが、ヴィクトリア朝の人びとにとって最重要の関心事のひとつが科学の進歩と既存のキリスト教信仰の相克という問題であったことは論を俟たない。ダーウィンの進化論がもたらす道徳的懐疑や不安を早い段階で受けとめ、それを詩に昇華させたテニスンの仕事について、第3章で著者は『国王牧歌』第2版(1869)でのアーサー王物語の聖杯伝説の語り直しに即して論じている。さらに第4章では1885年に完結する『国王牧歌』の全体を扱い、中世のアーサー王物語を用いて同時代の社会問題を扱う際に詩のジャンルとして牧歌を詩人が選んだことの意義を考察している。

第3部(第5～8章)では前半で『グィネヴィアの抗弁』後半で『地上樂園』を使ってモリス論が展開される。第5章ではモリスが同時代の詩人の一人ロバート・ブラウニングの「劇的独白」(dramatic monologue)の手法に触発され、アーサー王物語の再話において劇的手法を実験的に試みている次第を分析している。さらに第6章ではブラウニングとテニスンのモリスへの影響を検討し、『グィネヴィア』詩篇の「不統一性」という(当時の書評家たちが批判した)「欠点」を、モリスが先輩詩人たちとは異なる独自の詩的レトリックを模索していた証左として積極的にとらえている。

『地上樂園』を扱う最後の2章のうち、第7章は、20世紀前半のモダニズムの隆盛期にヴィクトリアニズムへのネガティブ・キャンペーンが展開されたなかでモリスの詩が T. S. エリオット、F. R. リーヴィス、ウィリアム・エンブソンらによって否定された顛末を 述、彼らの批判からモリス

詩を救出する弁明をおこなっている。「モリスのロマンス観はモダニストの批評家たちが批判したような逃避主義ではなく、アーノルドの言う非詩的な時代のなかで古いロマンスを語るための『現在を過去の一部』にする大いなる努力なのであった」(137)という著者の主張に私は首肯する。

第8章では1868年に『地上楽園』第一巻が刊行された直後にウォルター・ペイターが『ウェストミンスター・レビュー』(1868年10月号)に匿名で寄稿した書評をとりあげ、その一部が後に『ルネサンス』の名高い結論部に転用され、また他の部分も「唯美的な詩」として『鑑賞批評集』に収録された文献的事実を確認したうえで、『地上楽園』の物語世界が後年の唯美主義運動につながる質を備えていたことの意義を論じている。

以上の各論から引き出される本書の結論として、ヴィクトリア朝の「非詩的」な時代風潮のなかで、テニスンとモリスは世代の差はありつつもおなじように中世ロマンスを語り直そうとした点で共通するが、テニスンは桂冠詩人として自身に課せられた要請を受けとめて、女性の声や科学思想と宗教の相克の問題など、同時代の社会問題を自覚的に詩作に落とし込んでいったのに対して、モリスのほうはむしろ同時代の事象や風潮に背を向けて、自律的で唯美主義的な物語世界を構築した点で好対照をなす一方、まり一方は芸術の社会的役割に自覚的な詩作態度を有し、他方は同時代の社会状況を括弧にくくって芸術の自律性を希求する詩的態度を有していた、という見立てを提示している。

以上、本書のプロットをざっと追ってみた。全体として周到な手続きをとって丹念に議論が進められていて、ヴィクトリア朝期にマロリーを語り直す二人の詩人のスタンスを解き明かした力作であると評価できる。それを断ったうえで、以下で若干の疑問点を述べておく。

上で見た結論部分に関わる点であるが、たとえテニスンについては『国王牧歌』を主とし、モリスは『グィネヴィア』と『地上楽園』の初期の2作品に限っての考察だとしても、芸術の社会的役割の強調と芸術の自律性の強調という対立軸で双方の詩の傾きを整理するやり方には限界があるのではないか。むしろこの二分法は崩すためにこそ提示されるべきではあるまいか。「この硬い、宝石のような炎で常に燃えていること、この恍惚状

態を維持すること、それが人生の成功なのである」という名高いセンテンスをふくむペイターの書評「ウィリアム・モリスの詩」『ルネサンス』の「結論」の先行形が「芸術のための芸術」(=芸術の自律性の主張)というアジテーションの身ぶりであるのはたしかにそうだが、モリスの詩に仮託したペイターの美的エピクロス主義の信条告白は(とくにキリスト教信仰に関わる)不可知論に支えられている。これが社会主義思想に劣らずヴィクトリア朝社会のエスタブリッシュメントを震撼させる「危険思想」であったことは、若きペイターがその見解を口にして聖職への道を断たれたというエピソードが如実に示している。唯美主義(aestheticism)と不可知論(agnosticism)は一對の「イズム」として、ヴィクトリア朝中期以降の社会思潮と密接に関わるものとして捉える必要がある。

モリス自身は周知のように聖職者を志望してオクスフォード大学に入学し、高教会に傾倒して「時代に対する聖戦」を志向したものの、大学卒業時には芸術家への道へと進路変更をし、キリスト教信仰から離れてゆく。初期詩篇、とくに『地上楽園』で「空虚な時代の空虚な歌詠み」というペルソナによって語られる死生観に上記の「危険思想」を察知したのがペイターの書評だった。逆に護教論の立場から(それゆえ異教の見解を見下ろすような姿勢で、それでも共感を込めて)モリス詩を読んだのがC. S. ルイスであり、*Rehabilitations* (1939) 所収のモリス論は、「滅びの定め」(mortality)への諦観と「不滅性」(immortality)への渴望によって引き裂かれる詩人の激しい心的葛藤もしくは対立(conflict)を見事に分節化している(モダニズムの批評家たちとの同質性よりも、この点を示したのがルイスのモリス論の肝である)。その葛藤を中心的問題に据えてモリスの物語詩のみならず散文物語も併せて「ロマンス」というジャンルで括って総合的に考察したアマンダ・ホジソンの研究(Amanda Hodgson, *The Romances of William Morris*, Cambridge: Cambridge UP, 1987)も参照すべき重要な先行研究であろう。

以上、コメントがモリス論のほうに偏ってしまったが、本書全体について言えることとして、外枠の議論にかなりの紙数が割かれているのに対して、テキストに即しての論がいささか薄いように思われ、その点に私は不満を覚えた。とはいえ、見方を変えるならば、外枠の偏重はテニスンとモ

リスのロマンスを論じるための精密な準拠枠を確立するための選択であったと見ることもできる。その意味では、両詩人の文学的成果の総体、あるいはブラウニングらヴィクトリア朝詩人の仕事を考察していくうえで、本書は価値のある着実な基礎固めであると評価できるだろう。著者の今後の研究の進展に期待したい。